



感性豊かに深層心理を 追求し続けた 女流作家

お さき みどり
尾 崎 翠
Midori Osaki
1896(明治29)~1971(昭和46)

岩美町出身 日本女子大学国文科中退。
大正3年(1914)大岩尋常小学校の代用
教員となるが、大正4年(1915)散文「朝」
が『文章世界』散文欄に第1席で入賞し、吉
屋信子とともに注目され始めた。

さらに大正6年『新潮』に作品が載った
ことで文学に取り組む決意をし、小学校
を退職し、東京大学在学中の兄を頼り上
京。兄が下宿に実験材料を並べていたこ
とが後の代表作「第七官界彷徨」に描かれ
ることとなった。

大学夏休みの帰省中「無風帯から」を執
筆し、『新潮』に掲載された。同じ号の『新
潮』に、芥川龍之介、佐藤春夫、志賀直哉、武
者小路実篤らが作品を掲載していた。と
ころが翠の創作発表が日本女子大で問題
となり退学。その後は、上京と帰郷を繰り
返しながら、『少女世界』や郷里の文芸誌
『水脈』に作品を発表した。

昭和6年11月に「美しい貝がら」を『少
女世界』に発表してレギュラー執筆者の一
人となり、以後約30編もの少女小説を載せ
ている。

『女人芸術』が創刊されると、林芙美子に
誘われ執筆。また、映画『第七官界彷徨—尾
崎翠を探して』は、全国各地のみならず、海
外でも国際女性映画祭などに出品され、ド
イツ・アメリカ・フランスなどでも上映さ
れた。文学生命は十数年に過ぎなかった
が、戦後再評価された作家である。

主な著書 「第七官界彷徨」「こほろぎ嬢」
「アップルパイの午後」「木屋」
映画台本 「瑠璃玉の耳輪」『少女世界』連載の
33編の少女小説
参考 郷土出身文学者シリーズ⑦尾崎翠
尾崎翠・岡田美子・田中古代子選集



田中武子さん所蔵

県政史上初の女性県会議員

た なか はな こ
田中 花子
Hanako Tanaka
1901(明治34)～1984(昭和59)

明治34年(1901年)2月16日、東伯郡倉吉町(倉吉市)に商家の桑田岩蔵、勝子夫妻の三女として生まれる。

大正7年に気高郡湖山村(鳥取市湖山町)の田中道夫と結婚。

昭和3年、気高郡婦人会総会で「婦人参政権問題」について演説を頼まれた花子は、丸髷姿で演説。斬新すぎるテーマと丸髷姿のギャップもあり、大変好評を博した。

昭和15年には、気高郡婦人会の会長にも選ばれている。

終戦後、女性に参政権が認められると、気高郡の女性代表として県議会議員選挙に推挙され、県内トップの得票で当選。

当選後、気高郡内26町村全戸に「県政に関する要望」アンケートを実施し、その回答をもとに女性の声の代弁者として県議会での代表質問を行う。

夫の死後、県議会議員を辞職、鳥取県連合婦人会の初代会長をはじめ、教育委員や鳥取家庭裁判所の調停委員などを務める。

法の下に平等となっても、封建思想や家制度の中で育った女性の自覚が付いてきていないことを実感し、その意識改革に精力的に取り組み、生涯を通じて女性の地位向上に尽力した。

昭和59年(1984年)、83歳でその生涯を終える。

参考 鳥取市人物誌きらめく120人
鳥取県人物伝—20世紀を支えたふるさと先人郡—
とっどりの女性史 戦後からの歩み



助産師から国会議員へ ~国内初の女性代議士~

た なか
田中 たつ
Tatsu Tanaka
1892(明治25)~1985(昭和60)

米子市で生まれる。明治41年15歳の秋、肉親の反対を押し切って看護婦を志し、大阪で修業したが物足りず鳥取県で産婆の検定試験が施行されることを知り、急きょ帰郷し検定試験に見事合格。大正期に産婆と看護婦(現助産師、看護師)の資格を得て職業人として活動を始めた。それ以来技量を磨きながら、社会の問題にも関心を持つ。

大正初期は職業婦人になることが若い女性の魅力であり、たつは産婆になることを決意し、21歳で開業した。昭和18年(1943)51歳で鳥取県産婆会の事実上のトップである副会長に就任。(その頃は医師が会長の時代であった)。

当時、女性の参政権の実現を目指して戦前から活動していた市川房枝らの尽力も多大にあり、終戦直後の昭和20年(1945)12月に女性の参政権が公認された。参政権の取得で女性は自分たちの生活の基本を決める立法や行政に、初めて意志を伝えることが出来るようになる。

国や県が女性たちの社会的活動を促したこと、女学生が活動的になってきたこと、女性が社会と関わろうとしたこと、そして、

開業25年の産婆として一軒一軒妊婦の家庭の隅々まで知った体験で、食糧問題、育児衛生などの改善の必要性を感じた。

参政権行使の最初の機会は、昭和21年(1946)4月13日の衆議院議員の総選挙であった。また応援演説に、尊敬していた市川房枝女史が来県。鳥取県内の産婆・看護婦・保健婦会の後押しで衆議院に無所属で立候補し、女性国会議員39人の1人として53歳で初当選した。

公約は、「男性だけに政治を任せぬ！」妊産婦の待遇や母子保健衛生の改善、女性の地位向上や生活の解放、食糧難と闇撲滅であった。誕生を手助した子どもが栄養不良で死んでいく姿を見て、捨て石になっても世の中を何とかしようという強い思いがあった。

助産師として、ほとんど知られていなかったが、わが国初の女性代議士(1年間)として戦前、戦後の福祉の向上に力を尽くした女性であった。

参考

編者 田中たつ・女性史の会

谷口啓子、山本和子 米子プリント社

2011、2017:初めての女性代議士 田中たつ

関係資料集 「婦人問題に身命賭す」



日本最初の市民投票条例制定に尽力 女性運動と環境運動の指導者

こん どう ひさ こ
近藤 久子
Hisako Kondou
1911(明治44)～2004(平成16)

日野町根雨出身 大鉄山師(たたら製鉄
経営者)の近藤家第7代当主近藤寿一郎と
妻ラクの3女として生まれる。日本女子大
学化学科卒業後日本女子大学化学科助手の
職につく。

その後、郷里根雨町に帰り昭和27年から
根雨地区婦人会会長を務め、暮らしの問題
と環境問題を提起し、住み良い社会づくりに
尽力した。その間、通算34年間鳥取県連合
婦人会会長として、県内の地域婦人会活動
の指導者として活躍した。

「いのちと暮らしを守る」をモットーに他
団体とも連携して活動を進め、子どもを小
児マヒから守る鳥取県協議会、鳥取県消費
者団体連絡協議会、平等・発展・平和をめざ
す婦人の10年推進鳥取県協議会の会長を務
めた。

「魚や鳥が住めなくなれば、やがて人間も
住めなくなる」と環境を守る活動にも積極
的に関わった。藤本製薬が日野川上流への

進出を計画した際には、婦人団体、住民団体、
労働組合を結集した藤本製薬進出阻止住民
会議の会長に選出され進出を阻止。

さらに中海の汚濁を止めようと「ふるさと
の環境を守る住民会議」の結成に参加し、会長
として運動を展開、「中海淡水化賛否について
市民投票条例の制定を求める直接請求署名」
に取り組み、米子市の有権者の47%の署名を
集め、1988年日本最初の市民投票条例制定に
こぎ着けた。その後、国は中海の淡水化事業の
全面中止を決定した。

自由な精神の持ち主で権勢あるものに追
従せず、勇気を持って率直に自分の意見を言
い続けた。科学の目を持ち、真実・道理を大切
にする一方、思想・信条・立場の違いを超えた
共同行動を重視する女性運動と環境運動の
指導者であった。

著書 「わたしのみてきたヨーロッパ」「くらしの視点」など。

参考 とっどりの女性史 戦後からの歩み 鳥取県

「日野町誌 続編」日野町史編さん委員会 今井出版



所蔵：鳥取市立気高図書館

ひたむきに文学への夢を追い求めた 情熱の女流作家

た なか こ よ こ
田中 古代子
Koyoko Tanaka
1897(明治30)～1935(昭和10)

鳥取裁縫女学校を療養のため中途退学し、実践女学校通信教育で英語・国文を学ぶ。

1915年(大正4年)山陰日日新聞社に入社。県内初の女性記者の誕生として目立つ存在だった。当時18歳、断髪でさっそうとした出で立ちで、堂々と自己主張する姿は、“新しき女”と称された。1917年(大正6年)長女チドリが生まれた。しかし、この頃から夫安治博通と人生観や文学観にずれ違いが目立つようになり、間もなく離婚を申し出た。このような出来事で心休まることもない古代子だが、父の死や離婚問題など、心苦しい出来事が過ぎたあと、古代子の創作意欲は燃焼し、本格的な作家へと歩き始めた。

1919年(大正8年)小説「諦観」を書きあげ、その一方で朝日新聞社創業四十年記念懸賞小説に応募、「実らぬ畑」が選外佳作となった。世に初めて認められた小説である。

同年から翌年にかけての2年間は小説執筆で最も実りのある年と言える。古代子22歳から23歳。東京の『中央新聞』に「残されし花」を152回にわたり連載。翌年北浦みほ子のペンネームで「諦観」を『大阪朝日新聞』の懸賞小説に応募し、2位に入賞した。

その後は、詩や短歌、俳句を発表。激しい感情を表現した詩もあるが、心境を静かに言葉に託した感傷的、抒情的な作品も残している。

主な著書 「諦観」「実らぬ畑」「残されし花」「煙草」
詩歌誌に多数の詩、俳誌、総合誌に俳句多数
参考 郷土出身文学者シリーズ⑩
鳥取ゆかりの女性文学者 鳥取図書館編



所蔵：湯朝郁夫

GHQと亘り合い、 2000人の孤児の母となった

さわ だ み き
澤田 美喜
Miki Sawada

1901(明治34)～1980(昭和55)

三菱財閥の創業者岩崎弥太郎の孫娘として生まれ、岩美町出身の外交官澤田廉三と結婚。外交官夫人としての海外でさびやかな生活を送る。

戦後、白人・黒人の人種的特徴を持って生まれ、置き捨てられる子どもたちを見て、この子どもたちの母となる決意をした。進駐軍に誰ひとり立ち向かえなかったアメリカ一辺倒の時代、米兵の落としての子のための施設をつくるため、GHQと亘り合い、ついに総司令部は、政府の決めた金額で施設を買い戻すことに同意した。苦難を超え、元岩崎家の別荘を買い取り、昭和23年神奈川県大磯町に「エリザベス・サンダース・ホーム」を創立する。

混血児の成長に伴い就学問題も起こる。美喜は園内に小・中学校を作るとともに、自立のための技能習得を図るため、男子と女子の職業教室を建てた。

たびたび渡米し、募金活動を精力的に行う一方、養子として、迎え入れられるよう米国の移民法の改正を訴えた。

夫の故郷、浦富海岸熊井浜の別荘(鷗鳴荘)は、子どもたちの臨海学校の場となった。

ここは入江になっており、肌の色を気にする事もなく毎年のびのびと楽しめる夏の子どもたちの楽園となった。今もこの地にホームで育った子どもたちが家族を伴い訪れるという。

実子澤田信一は、「実子が孤児になり、孤児が実子になった」と述懐している。

参考 GHQとたたかった女沢田美喜
青木富喜子著 新潮社
黒い肌と白い心 沢田美喜 創樹社



法服姿の中田正子
写真(個人蔵)/写真提供(鳥取市歴史博物館)

日本初の女性弁護士

なか た まさ こ
中田 正子
Masako Nakata
1910(明治43)～2002(平成14)

明治43(1910)年12月1日、今の米子市出身の職業軍人・田中國次郎と槇子夫妻の次女として東京で生まれる。新渡戸稲造が校長を務める女子経済専門学校で学んだ後、附属高等女学校で教壇に立ち学費を賄いながら日本大学法学部の選科生となり、昭和9(1934)年、明治大学に女子部ができると法科三年に編入。

猛勉強の末、27歳となった昭和13(1938)年、他の2名とともに女性で初めての司法試験合格者となる。

東京の弁護士事務所で勤務する中、鳥取県出身の中田吉雄と昭和14(1939)年に結婚、翌年から弁護士として働きはじめる。

雑誌「主婦の友」の法律相談を担当するなど多忙ながらも充実した日々を過ごし、昭和20(1945)年、夫の肺結核の悪化に伴い、夫の実家のある八頭郡若桜町に疎開する。

終戦後、新憲法や新民法が施行され、正子も婦人会の集まりなどで人々に話す機会が多くなってきた。夫の吉雄が県議会議員、次いで国会議員となり、正子も鳥取の地で代議士の妻として務めながら、弁護士の仕事も再開し、昭和25(1950)年、鳥取市馬場町に「中田正子法律事務所」を開く。

「私は女性のために法廷に立っているのではない。依頼人の権利のために戦っている」の信念のもとに弁護士業務に従事し、女性で初めての日本弁護士会連合会理事、鳥取県弁護士会会長を務め、裁判所の調停委員や鳥取雇用機会均等調停員なども歴任。

女性弁護士第一号として華々しく注目を集め世に出た正子は、終生鳥取の地で弁護士の道を貫き、平成14(2002)年、91歳の生涯を終える。

参考 鳥取市人物誌きらめく120人
とっりの女性史 戦後からの歩み